

令和3年度 第3回酒田市総合教育会議議事録

開催日時	令和4年2月18日(月) 13:30~15:10
開催場所	酒田市民会館「希望ホール」3階 小ホール
出席者(構成員)	丸山至市長、鈴木和仁教育長、岩間奏子委員、渡部敦委員、神田直弥委員、村上千景委員
(学識経験者)	秋田県生涯学習センター 皆川雅仁主査(秋田大学非常勤講師)
(市長部局)	竹越攻征総務部長、宮崎和幸企画部長、大谷謙治市民部長、松永隆まちづくり推進課長補佐
(事務局)	池田里枝教育次長、齋藤一志教育次長、高橋浩平企画管理課長、阿部周学校教育課長、五十嵐敏剛指導主幹、阿部武志社会教育文化課長、齋藤聡スポーツ振興課長、岩浪勝彦図書館長、杉山稔企画管理課長補佐、工藤充学区改編推進室長
協議事項	本市の教育を取り巻く諸課題について

1 開会

(池田教育次長)

これより令和3年度第3回酒田市総合教育会議を開会いたします。

私は本日の会議の進行を務めさせていただきます教育次長の池田でございます。どうぞよろしく願いいたします。本日は、2名の方から傍聴のお申し出を頂いておりますので、報告を申し上げます。なお、本日の資料につきましては傍聴の方へ配布をさせていただくこととします。予め本日の資料につきましてはお配り、または配信をしておりますが、お手元へのご準備は大丈夫でしょうか。後程、協議でお話を頂戴する皆川先生のプロフィールにつきましてもお配りの資料のとおりですので、ご参照をお願いいたします。それから、本日の総合教育会議の終了時刻は、午後3時を予定しております。皆さまご協力の程、よろしくお願いいたします。

それでは初めに丸山市長からご挨拶をお願いいたします。

2 あいさつ

(丸山市長)

皆川先生、今日はよろしくお願いいたします。酒田市長の丸山でございます。今日、本当に大変お忙しいところ教育委員の皆さまにご出席いただきまして本当にありがとうございます。この総合教育会議、今年度最後になりますけれども、会を重ねて随分いろんなテーマで皆さんと意見交換が出来たなということで、大変うれしく思っているところでございます。今回、今日のテーマでございますけれども、お手元の資料にもございますが「地域学校協働活動の推進について」ということで、テーマを設定させていただきまして、オブザーバーに秋田県生涯学習センター主査の皆川先生にご出席を頂いたところでございます。後程、またお話を伺いできること、大変うれしく思っております。先生、よろしくお願いいたします。

さて、この協働という言葉ですね。実は私、手元に持っておりますけれども、酒田市の総合計画、一番上位の計画、この計画の中でも住民との協働ということが一番のテーマとして掲げて、まとめさせていただいた計画でございます。今回のテーマにあります地域と学校の協働という言葉、これも決して目新しい言葉ではないわけですね。この酒田市の教育振興基本計画という計画がございます。これを見ますと、基本方針の5番と6番のところに、例えば、地域とともにある学校づくりの推進ですとか、あるいは地域と協働する教育の推進、こういった言葉が載っているわけございまして、この地域と学校の協働ということは、そもそも我々の教育の方針の中にしっかり謳われている。それからこのことも酒田市の基本計画の中でも柱として位置づけられている概念ではないかなとこのように思っております。ただ、今回このテーマを取り上げさせていただきましたのは、実は令和4年度以降の酒田市のまちづくりについて、何を柱にしていこうかということで、鈴木教育長とも話をしたときに、実はスクール・コミュニティという言葉が出てまいりました。これは後ほど教育長からお話があるかと思いますが、令和4年度から実はこれまで準備をしてまいりました小中一貫教育が酒田市の正式に全中学校区でスタートするという中で、これからは地域づくりと中学校区単位での学校教育、それを連携させて、地域と教育を両方回していく、そういう酒田市としては方針に立つべきだろうということをご提案頂きまして、実は間もなく酒田市の3月定例市議会が開催されますけれども、その中で私も施政方針ということでこのスクール・コミュニティという概念を打ち出させていただいたところがございます。偏に鈴木教育長から教えていただいたその方針を、そっくりリメイクしたとかコピペをしたようなものでもあるのですけれども、しかしながら小中一貫教育を踏まえて我々がこの地域でやろうとしていること、まさにこのことであると。これからは中学校区単位でしっかりと地域づくりもやるのだけれども、何よりも基本には子どもたちの教育というものがあって、故郷を愛する気持ちの醸成から始まって、最終的にはその故郷で活躍できる人材をこの地域がしっかりと育てて、そして輩出をしていくと、そういった流れの中で、今回のこの地域と学校の協働というのはまさに必須の取り組みなんだろうと思っております。今日はそういった意味で、皆川先生から様々な事例等もご紹介を頂きながら酒田市における地域と学校の協働、これをどう持っていくかということをご議論できればいいかなとそんな思いを持っております。限られた時間で、ひょっとしたらもっともっと教育長そして皆川先生のお話を聞きたいという話があるかもしれませんが、今日は一般部局からもかなり幹部が出席しておりますので、引き続きこれからの総合教育会議を酒田市のまちづくりの一つのエンジンとして回していくためにも、いい会議になればいいなとこんな思いを持っているところでございます。先生、今日はどうぞよろしくお願いいたします。

(皆川先生)

よろしくお願いいたします。

(池田教育次長)

続きまして、鈴木教育長からご挨拶をお願いいたします。

(鈴木教育長)

改めまして皆さんこんにちは。皆川先生、こんにちは。まずもって本日のこの総合教育会議ですけれども、丸山市長におかれましては大変お忙しいところ会議を開催していただきまして誠にありがとうございます。また、皆川先生には本当であれば酒田において頂いてと思っておりましたが、ただこのような形でご助言を頂けるということで、大変楽しみにしております。どうぞよろしくをお願いいたします。ただいま市長からもお話ありましたけれども、私自身はこの4月から始まる小中一貫教育を進めていく上での先ほどエンジンという表現がありました。まさにその通りで、学校だけで出来ることって限られておりますので、これまでやってきたこと、酒田の良さを活かしながら、新しいこの中学校区単位の仕組みづくりみたいなものが出来ればいいのかと、そうなることでも教育委員会だけの話では取まらないだろうと考えておりました。市長部局の皆さんと協力して進めていかなければならないものだろうと考えておりました。私自身は実はもう20年近く前、皆川先生はおそらくよくご存じだと思いますが、東京都で中学校に初の民間校長ということで、リクルートから藤原和博先生という方が行かれて、杉並区の和田中学校、一時すごく話題になってマスコミ等にも取り上げられましたが、この方がそもそも地域との連携のことを色々とやり出したんですね。今日おそらく皆川先生のお話にもあるでしょうけれども、教育基本法に位置付けられるなど、いろんなことと関わってきて、実はその時杉並区まで行きました。それで色々教えていただいて、その藤原先生が奈良の一条高校で校長をしたときにも光陵高校の先生を派遣して色々勉強させてもらったのですが、やはりそれが脈々と繋がっているといいますか、持続性の高い取組みになっているのを見ておりました。ぜひ本市でもそういった取組みが出来ればなと思ったところです。いずれにしても、小中一貫の取組みというのはこれで完成ということはもちろんないわけですので、少しずつ出来るところからそれぞれの中学校区の良さを活かしながら取り組んでいきたいというふうに考えておりますので、今日は忌憚のないご意見を頂ければと思います。どうぞ皆川先生よろしくをお願いいたします。

3 協議

(池田教育次長)

それではこれより協議事項に入ります。ここからは市長に座長をお願いいたします。

(1) 本市の教育を取り巻く諸課題について

(丸山市長)

それでは早速協議事項の(1)本市の教育を取り巻く諸課題についてということで、「地域学校協働活動の推進について」を協議したいと思います。最初に鈴木教育長の方から地域と学校の協働活動に対するお考え等、これをお聞かせいただければなどこのように思っております。よろしくをお願いいたします。

(鈴木教育長)

今、画面に映し出しているのは皆さんご存じの通り本市の小中一貫教育の時のビジョンとして打ち出したものです。まなびの樹ということで、清水先生の学力の樹を酒田市バージョンにしたものですが、この中で根っこの部分、根の力に着目をして、ここを育てるのだとそのため9年間の教育課程を考えていくのだと、こういうことでスタートしたわけです。その中で、今それぞれの中学校区で、実は来週会議を予定してはるんですけども、例えば特別活動だったり総合的な学習だったり、何かを使いながら防災教育を柱にするとか、キャリア教育を柱にするとかそこそこで議論していただいて、それぞれの中学校区で9年間通した、系統立てた教育課程を考えて頂こうと、それを少しずつ進めていこうと、こういうことを考えているわけです。そうすると、アンダーライン色々引いてますけれども、どうしたって学校だけではできないことがたくさん出てくるということで、地域・家庭との協力が絶対に必要になってくるというわけです。それが学校だけではなくて、あるいは子ども達だけではなくて、地域にとってもいい取組みになることを信じているわけですけども、そのビジョンを土台にして、こんな図を書かせていただきました。各中学校区で、7つの中学校区様々考えておりますので、来週この赤い部分については各中学校区で考えられてきたものの共通項を抜き出して、本市の共通の取組みとして何か打ち出していくことができれば、外部に対しても発信力の高いものになるだろうと。どここの中学校はこれをしている、どここの中学校はこれをしているではなくて、それはもちろんいいんですけども、本市としてどこの中学校区に行っても本市の小中一貫としてやるんだよということが打ち出せれば、非常に分かりやすいものになるかなと考えておりました。これを進めていく上でも、こういった地域とのこれから皆川先生から詳しく説明していただきますけれども、協働体制といったこういった仕組み作りは必須のものになるだろうと思っています。その考え方というのは先程市長からもございましたが、スクール・コミュニティという考え方でございます。一言で言えば学校を核とした地域づくりということになるわけですけども、皆川先生ご覧になられていると思いますけれども、本市のホームページです。防災センターと一緒にしたコミュニティセンターが市内各地にございまして、非常に各小学校区との結び付きが強い形を取っております。先程の図で申し上げますと、ここにあってコミュニティ振興会というのが下に書きましてけれども、ここと小学校とはほとんど1対1とか1対2だとかいう形で、いろんな捉え方まで様々な連携、協働して取組みもたくさんしてきています。もちろん中学校もしてはるけれども、僕の印象としては小学校の方がより濃いかなと思っています。元々そういったものがある。その良さを活かしながら、小中一貫、中学校区取組みとして地域づくりということも意識しながら取り組んでいくことはできないものかということで、その地域プロデューサーなるものを置いて、この方に活躍していただくことによって、その仕組みを円滑に動かすことが出来るのではないかと考えているところです。私の方からはここまでにさせていただいて、あと皆川先生の方から様々なこれまでのご体験等を通して、ご意見ご指示を頂ければと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

(丸山市長)

ありがとうございました。それでは次にいよいよ皆川先生から、ただいま教育長からお話を頂いた内容に関してご助言やご意見、また、本市がこれからこういった活動を進めるにあたってのアドバイス等ございましたら、お聞かせいただければありがたいと思います。

それでは、皆川先生よろしくお願いたします。

(皆川先生)

改めまして皆さんこんにちは。私は秋田県生涯学習センターで社会教育主事をしております皆川雅仁と申します。よろしくお願いたします。今回、この会議に参加させていただくにあたりまして、私なりに過去の酒田市の総合教育会議の議事録をすべて読ませていただきました。驚きました。内容がものすごい濃いですね。私も実際に他の総合教育会議にはオブザーバーとして参加したことがあるんですけども、他が良いとか悪いとかいうことではなくて、酒田のそれについては本当に委員の皆さん、そしてそこに関係されて出席された皆さんの発言が、当事者意識に溢れているという感じがしまして、まさにこれこそ本質なんだなと随所で見せていただきました。そんなすごく意義深い会議にこういった形で私が参加させていただくことについては、本当に光栄の極みであります。テーマは「地域学校協働活動」ということですが、この話をさせていただいてなぜ私が皆さんとご一緒させていただいているのかなとよく考えてみますと、私は研究者ではないんですね。いわゆる実践者、経験者なんです。なので、私が実際に経験してきたことを皆さんに少しお話させていただく中で、お伝えしたいことがその中で網羅されていけば嬉しいなと思って、資料に基づいてお話をさせていただきたいんですが、よろしいでしょうか、皆様。よろしくお願いたします。

前置きとしまして、イメージを皆さん共有させていただきたいなと思って、支援・連携・協働というこの3つの言葉、お話させていただきたいと思います。私は、いろんなところでお話をしてきているんですけども、私、実は体の半分が学校教育で、もう片方が社会教育みたいな人間なんです。学校にいた時と社会教育にいた時には、ほぼ17年、19年ですから似たような年数なんです。もちろん県教委でも社会教育のお仕事もしてまいりましたし、市町村の派遣社会教育主事ということで市町村の社会教育行政にも携わってまいりました。もちろん学校では教諭、それから教頭、それから校長もやってまいりまして、校長は小学校で3年、中学校で3年。うち中学校の校長は統合校の校長2年やっているんです。できたばかりの学校の校長を2年させてもらいました。そこでの様々な経験を凝縮して今お話させていただきたいと思います。

私は、この支援というのは、昔学校支援地域本部事業というものが、ちょうど学校週5日制が本格実施された後、文科省の音頭で全国にたくさん行われていったんです。いわゆる支援なんです。学校を地域が支援していくというスタイルがどんどん波及していったんです。おそらく山形でもたくさんあったはずだし、山形県の場合にはYYボランティアに代表されるような青少年のボランティア活動が全国トップレベルで行われていましたので、というかトップだったので、そういった意味ではもう何も申し上げることないんですけども、そう

いった若い世代の学校教育への支援とかも含めてですね、全国的に広がっていった時期があったんです。学校週5日制本格実施以降ですね。私はこの支援は契約と似ていると捉えているんです。つまり、これやってほしい、これやってあげますよ、それが終われば、履行されればその関係性はそこでおしまい。そんな感じです。例えばミシンの勉強があったりして、地域の人から入って頂いて授業をやりますよね。するととても助かる、私もそうでした。そうすると一旦その時に授業が終わると子どもたちがどうもありがとうございましたと言って、地域の人たちもとっても喜んでありがとうと言うんですが、この方たちに次いつ会えるのかなという1年後だったりする。言ってしまうと、ちょっと極端ですが、それが契約に似ているという支援ですね。

では連携とは何かというと、団体の競技、スポーツ、例えばサッカーとか、バスケットボールだとか、同じ時に同じ場所において、勝利するという目標にみんなで向かってやるんだけど、例えばサッカーで言えば、フォワードの人はフォワード、ゴールキーパーはゴールキーパー、それぞれ役目が違うんです。でも一緒にみんなで頑張る。私はこれが連携なんじゃないかなと思ってまして、協働はもうちょっと違ってまして、皆さんにこんなことを言うのは失礼かもしれませんが、例えばすごい高い山に登っていくときのイメージってたぶんお出来になると思うんですけども、いわゆるアタック隊っていう頂上に到達する人たちっていうのはごくわずかな方たち。でも、そこに至るまでの間は実によくの方たちが動いている。それぞれのタイミングで、それぞれの役割を果たしている。やるべきことは皆違うんだけど、でも目標はエベレストの山頂に到達する。これが私は協働だと思います。まさにこの協働スタイルが構築できるかというのがスクール・コミュニティの肝になるだろうと私も思っています。

では次の話。法令をちょっと見ていきたいと思います。特に教育基本法と社会教育法を中心に。平成18年の教育基本法改正というのは、本当に大改正だったわけですし、紫色のところ新設と書いてありますが、これみんな新設された条文なんですよ。生涯学習の理念というのでも新設されました。13条見ていただきますと、学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力。この時まで協働という言葉になってないんですね。連携協力ということで新設されています。そんな中で、生涯学習については、これについてはもう十分皆さんご理解いただいていると思いますのでここは飛ばしていきますが、社会教育のお仕事って何ということになると、個人の要望や社会の要請にこたえて、社会において行われる教育。それで、要望・要請という言葉出てまいりますけれども、これ要請の方が若干強い意味合いがあると私は解釈していて、そうするとやはり今大事なのは社会の要請に応えるのは社会教育のお仕事なんじゃないかなというふうに私は解釈しています。そうすると、社会の要請って何かといいますと、そこにざっと書いてありますけれども、地域の活性化であるとか体験活動、あるいは学校・家庭・地域の連携・協働とか障がい者の生涯学習、あるいは地域づくりの担い手づくりとか防災教育はもちろん、まだまだいっぱいあるんですけども社会の要請というのはその時その時で変化はしていくものの、社会教育にとっては非常に重要。要請に応じていくというのは。13条、先程もお話しましたがけれども、ここで学校・家庭・地域の連携・協働がは

つきりと規定されたということですね。つまりここにおいて一番重要だと思っているのは、関係者はみんな一緒に事をしなくていいんだ、役割と責任を自覚したらそれぞれの役割と自覚で以て動いてくれということなんだと思うんです。ただしその場合大事なことは、登る山がバラバラでいいのかという話になるのですが、それこそがスクール・コミュニティもコミュニティ・スクールもそうなのですけれども、やはり同じ山を目指していくという大前提が必要だと思うのです。それが、これから先に必要になることだろうと思いますし、私自身もそこが肝だなと思って学校運営をしてきたという経緯があります。社会教育法の改正があって、市町村教育委員会の事務の中に、ついこの前ですよ、平成29年の改正ですから。ここにあるとおり地域学校協働活動はちゃんとやるべきものと規定はされているけれども、教育委員会としては、要は円滑かつ効果的に実施されるように色々なことをしてくださいと書いてありますね、実際。それは、体制整備であるとかですね、啓発活動であるとか、あるいは必要な措置を講ずるということなので、まさに社会教育はそういったことを重要な責務の一つとして教育委員会が担っていくんだということになったんです。先程も出てきました「地域学校協働活動」って何なのってことなのですけれども、意外にこの理解がバラバラになっていることがあるのでここで押さえておきたいのですが、「地域学校協働活動」これまでも学校支援活動であるとか地域活動であるとか体験活動いっぱい行われてきてますが、要はたった一つ肝になるところは、これは子どもたちの成長と地域の活性化の両方目指しているんだということが大前提になるということなのですね。さらに、地域と学校はパートナーである。つまり対等関係で行われなければならない、支援ではダメだということなのです。どちらかがどちらかのためにやってあげました、やってもらいましたというのではないんですね。同じ目標に向かってパートナーシップでやっていかないとそれは地域学校協働活動じゃないんだというのが大前提なのです。そうすると例として上の方に書いてありますけれども、子どもたちが地域に出て行って行う郷土学習、単にそうやって書いてありますけれども、でもこれ郷土学習やったらそれでいいのかという話なんですね。でも地域学校協働活動と言える郷土学習は、必ずここに地域住民が入っている。そして郷土を学んでいくその中に、地域の活性化にも繋がる要素がある。あるいは子どもたちの成長に明らかに寄与している。そういうものじゃなければ地域学校協働活動ではないんです。じゃあその前提として、先程から申し上げている目標共有がなされているということがなければいけない。酒田であれば酒田の教育はこういうふうに行うんだ、こういう街づくりに寄与するんだという、そういう目標を皆さん理解した上でやってないと、意味を成していかないということです。地域行事に関して、ただ単に行事に参加していればいいのか、そうではなくて、参画しないと意味がないということです。参画するということは目標を共有するというに他なりませんから、そういう活動になっているかということですね。具体的に言うと、そこに書いてある通りなのですが、特にその社会教育の分野で言いますと、文科省メニューになっている地域学校協働活動、いわゆる文科省補助事業になっているものが少し上の方に書いてあります。例えば、放課後子供教室であるとか地域未来塾、家庭教育支援チームなどですね、その他諸々ありますけれども、もちろん見守り隊もそうです。それ以外は地域学校協働活動じゃないのかといっ

たらそうじゃない。地域の行事、イベントでボランティア活動、全部これ目標が共有されて、そしてパートナーシップでもって行われているものであれば地域学校協働活動になるんですね。地域学校協働活動になっていない活動はと言うと、実はいっぱいあるんだけどここは言及しませんが、支援というものです。私ここで皆さんと共に考えてみたいのが、学校教育と社会教育の今現在の本当の課題って何ということですか。私、現在社会教育に身を置いていますけれども、もちろんこの後学校教育についても言及するのですが、社会教育の課題って何かって言うところには書いてあるんです。いろんな状況があります。全部は申し上げませんが、今社会教育を基盤とした人づくり、繋がりづくり、地域づくりが本当に必要なんだって言われています。なぜ社会教育なんですか。これはですね、社会教育というのは実は非常に利害関係性が低い仕事なんだと私は思うんです。例えばちょっと言い方悪いんですが、例えば社会教育のお仕事、仮にある事業を行わなかったとします。それによって例えば今早急に地域住民の生活に何か大きな支障をきたすとか、それをやらなかったからといって明日、明後日の生活に困ると言うことはそれほどはないんです。社会教育の仕事というのは20年後30年後を見据える、あるいは学校教育と手を携えて10年後を見据えてというようなものが多いものですから、そういった意味では社会教育というのは欠かせないものだと思います。例えば住民が地域の運営の担い手となっていく場合、それ今求められています。どうやって地域運営に参画すればいいのかという命題が与えられたとき、皆さんどうお答えになるでしょうね。どうやったら地域運営に参画できるか、あるいは生涯に渡る学習とその成果を活かす社会、いわゆる生涯学習社会が充実すべきだと言われてはいますけれども、じゃあ学習成果はどうやって社会に活かせばいいんですかと問われた時、何と答えますか。例えばそういうことです。地域課題というのは実に地域ごとにみんな異なっていますけれども、少なくとも今共通項として挙げられるのは持続可能な地域社会をつくっていきけるかどうかということと、もう一つは住民相互の繋がりづくりが本当にできているかどうかだと思います。私はよく縦割り地域と言いますが、実は学校から見ても地域というのは縦割りになっています。例えば顕著な例で申し上げますと、地域の中にいろんな行政の皆さんから降りてくる仕事を担っている委員会とか協議会とかたくさんあると思いますが、そういったところ、自分が所属しているところは分かっている、それ以外のところについての理解というのは意外にされていません。それは私が校長の時にとってもよく分かったんですけども、つまりそれぞれの活動については一生懸命頑張っているけれども、俯瞰できているかということそうじゃないってことですね。つまり横の繋がりって意外にないんだ。社会教育の方向性としては、だからこそ開かれ、繋がる社会教育の実現を目指すべきなんだろうということですね。一つは地域学校協働活動がそのきっかけづくりになるでしょうし、防災もそうです。例えばどうやって地域と学校がともに手を携えていけばいいのか、どうやったら連携・協働になるんだ、連携更に協働にまで行けるんだらうか、どういうフィルターを通ればいいんだということなんですね。あるいは、例えばネットワーク行政の実質化なんてよく言われますけれども、じゃあ多様な主体と連携・協働すればって簡単に言いますが、これとても難しいことなんです。多様な主体と連携・協働するには目標共有という大前提が

ありますから、どうやったら目標共有できるのかという話なんです。そして、そのためには人材がとても重要です。どんな人が活躍するのかと言いますと、私自分が社会教育主事で申し上げにくいのですが、重要な仕事を担うのは社会教育主事だと言われているし、公民館主事だとも言われています。そして今まさに地域学校協働活動推進員、もしかしたら地域コーディネーターという言い方をしているかもしれません。酒田の場合には地域のプロデューサーですね。ではその方たちはどうやって学校と地域を繋げていけばいいのかということになりますよね。では、その方法論をお話します。一方、学校の課題って何かというと、まさに今新学習指導要領に基づいた教育課程が組まれているはずですし、学校では社会に開いて教育課程を編成しているはずですが、実はこれ簡単なことではなくて、どこまでやれば社会に開いたと言えるのかということ、例えば子どもたちが未来社会を切り開いていくために必要な資質能力を育成していくんだけど、その資質能力は何かっていうのを社会と共有してくださいって新学習指導要領には謳われているんです。じゃあ、皆さん社会とどうやって共有するんですかって問われたときに、校長先生たちは何とお答えするでしょうか。あるいはカリキュラムマネジメントが大事だって言われてますけれども、その中でも特に大事なことが地域資源の活用や社会教育との連携だって言われてますが、じゃあそれを学校としてどうやって実現するんでしょう。その方法として、こういうことをやりますって具体的に言えるのかということなんですね。そして社会に開かれた教育課程、なぜ今必要なのかということ、大目標としてよりよい学校教育を通じて、よりよい社会をつくる、これが全国共通の課題なんですよ。私、学習指導要領のことを全国共通学校取扱説明書って言ったりするんです。そして、学校で作成している教育課程のことを学校ごとの取扱説明書って言ったりするんですが、この学校の取扱説明書というのは、全部異なるものなんです。学習指導要領を基にしてつくりましても、全部異なるんです。これが今もう小中学校とも本格スタートしているので、そういうものになっているかということが重要なんです。なぜそうならないといけないか、それは社会の変化に対応できないからなんですよ。そういうふうに編成した教育課程じゃなければ社会の変化に対応できないからそういうふうにやるんです。さて、社会に開くことは協働に繋がると私書きましたけれども、なぜそうなのかということ、要は地域や社会との接点を持って、地域の人々などとの繋がりの中でつくる。この行為こそ協働に繋がる架け橋になると私は思っていますし、私自身そうやってまいりました。さて共通する課題、これまでで学校教育と社会教育どちらにも出てきた言葉があると思います。つまり開く、繋がるですね。じゃあどうやったら開いて繋がれるのかということに、方法はたくさんあります。先程教育長さんがお話になりました、市長さんもお話になりましたスクール・コミュニティ。まさにそれがこの方法の1つなんです。私は何を選択したかということ、その時校長だったんですが、私は学校運営協議会、コミュニティ・スクールというのを採用したんです。そして、その中で熟議というものを多用することによって、先程のどのようにつながるか、どうやったら出来るのかということのを具現化させていったということになります。その事についてはこの後少しお話をします。私が学校運営協議会、コミュニティ・スクールに着手した理由ということで少しお話をします。

私、実は校長になる前に、東日本大震災のボランティアに行かせていただく経験があったんです。そこで私が見たもの、聞いたもの、体感したものは、地域にとって学校の存在って何なのかっていうことなんです。もうちょっと言うと、学校が避難所になっています。その避難所の中で繰り広げられている様々な出来事、時間の関係で細かいところまでお話できませんけれども、一言で言うと子どもたちの力が凄かったんです。そして、学校と地域の関係性の深さ、関係性の濃さ、それが実は復興にとっても大きな影響を及ぼしていた。簡単に言えば、学校と地域が face to face で繋がっているところ、子どもたちと地域住民が face to face で繋がっているところが、ものすごく復興スピードが速かったんです。私、その時考えました。学校って誰のものなんだろう。学校は先生のものかな。子どもたちだけのものかな。色々考えたとき、やはりこれは地域住民のものなんだ、そういう結論に至るんですね。学校は地域住民にとって誇り、宝なんだということが分かった。有事の際には住民生活の砦になる。そこで私は初めて小学校長になった時に、1 か月ほどいろんな会合に出て地域住民と話をし、てまいりました。そして全くの任意の組織として、地域学校防災協議会というものを独自に設置したんです。14名の会員で。この指とまれ形式のもので。誰からも言われていませんし、地域住民との話合いの中でそうなっていました。地域の重鎮の皆さんも入っていれば、PTAの方もいれば、色々いらっしゃいました。学校のご近所さんもいらっしゃいました。さて、話し合う中で分かったのは、地域住民の願いや子どもたちへの思いがすごく強かったんですね。子ども達の命を守る、しっかり育ててもらいたい。本当に皆さん口々にお話されていました。そうやって考えていったときに、じゃあ今の自分が赴任した学校の教育課程って、本当にそういった住民の願いが活かされているのかどうかということを私自身考えさせられました。もちろん先生たちで議論もしました。それで、1つの結論に至ったのは、キャリア教育の計画を見直さなきゃということですね。私は、教育課程の根幹部分は何かということ、キャリア教育だと思ってます。そこからだと、全ての教科領域に横断することがとてもしやすいのです。キャリア教育を根幹に据えると。しやすいからそうやるのではなくて、まさにキャリア教育こそ地域の願いを反映させて、学校を運営していくのに最も重要な分野だと思ったからです。そしてこのキャリア教育は、学校外の活動との連携もとても把握しやすかったんです。つまりキャリア教育の視点に立つと、学校の外で行われているいわゆる社会教育で行われている様々な活動が、見やすかった、連携しやすかった。まだこれを始めたとき私の中に協働という言葉は存在していませんでしたが。なので連携という話ですね。今から10年も前の話なので。地域学校防災協議会で本音で話し合っていく中で、実に私の心を動かした言葉がありました。それは地域住民からの言葉です。「代表の温度が変わると学校も地域も変わるんだよね。代表の温度に動かされちゃうんだよね。それまで大事だと思っていた教育活動が、校長先生が変わった瞬間にもうそれはいいから、その時間はドリルや子どもたちの学力向上のために学習の時間にするんだ。それまで大事だと思っていた体験学習がこれは来年度からやらないんだ、急にそうやって決まっていったんだ。」と言うんですね。つまり持続可能じゃない。これどう思うって問われた時に、私は目が覚めた思いがしました。地域住民は学校が思っている以上に学校のことを思ってくれているんだ。そして学校運営協議会という

制度を PTA の当時の会長さんが紹介してくれて、私もその時初めて学校運営協議会制度が有効なんじゃないかと思って、だったら自分たちがやっている地域学校防災協議会と学校運営協議会はそれほど変わらないから、皆でこのコミュニティ・スクールに「せいの」で乗り込もうかと言うことで、ある日乗り込むことに決めました。そして、教育委員会と協議をし、まさにボトムアップで私はコミュニティ・スクールへの道を歩んでいくことになったんです。それからやったのは、まずは自分たちの地域の事を一生懸命見つめること。地域の学習材、地域の人材をもう一度洗い直すこと、そして学校と地域の繋がりはどういうところで繋がってきたのか、片方向なのか双方向なのか、依頼されてやってきたことなのか率先してやったことなのか、1つ1つ吟味していきました。そして、学校の中に地域っていうのはどれだけ入っているんだろう、地域の行事で学校はよく使用されているし、地域の資料は学校の中にある。もしかして学校って地域の財産なんだ、大事な財産なんだと気付いていきました。そして自分たちで学校運営協議会として動いていくときに、つまりコミュニティ・スクールとして動いていくときに、自分たちのまず足元を見て、私たちは地域コーディネーターを置かないことにしようという選択をするんです。学校運営協議会は委員 12 名で組織しましたがけれども、その全員がコーディネーターでいいだろうと。なぜかという、皆近所に住んでいたんです。10 分以内に電話すれば学校に集まったんです。そして、全員集まれない時は別の人を入れたりして、どんどんいろんな人が集まってきて、何度も話し合いを重ねていったんです。これ何が良かったかと言うと、報酬が年額なんです。学校運営協議会の委員報酬が年額。1 回いくらじゃないから何回やってもいいんです。そうやっていろんな議論をしていきました。もちろん教育委員会が指定してくれて、初めてコミュニティ・スクールになるんですけども、この時は指定する側も指定される側も手探りでした。分からないから担当と教育委員会の指導主事と議論しながらやっていったんです。そのころ私は「地教委とともにあるコミュニティ・スクール」と感じてました、自分の学校のことを。そして根幹に据えたキャリア教育を見直して行って、最終的に根幹に据えたのは ESD の視点ですね。「持続可能な開発のための教育」の視点を入れていこうということです。皆さんはよくご存じだと思いますので、ここについては言及しません。そして私社会教育が専門でしたので、社会教育関係団体との連携の在り方も見直していかなければいけない、支援から協働へ、当時は連携へということなんですけれども、そこにシフトすべきだということを皆で話し合っていて、その方向に変えていきました。それから今まで様々な地域活動に子どもたち、学校が関わってまいりましたけれども、その関わり方も改革すべきだと、強制的とあえて書きました。強制的に出ていくのではなくて、自分たちが前のめりになって参画するにはどうすればいいのか。その答えはたった一つでした。先生たちが住民に触れることでした。先生たちが住民と触れていく中で、だんだん地域活動の本音が分かってきました。当然日曜日とか土曜日とかに出ていくわけですがけれども、それでも 1 回出ると先生たち変わっていくんですね。忙しい、分かります。でも、ここはなんとかしてジャンプアップしなければいけないところだったのです。最終結論です。キャリア教育の最終目標は、六次産業化ということになりました。地域の特性を活かした六次産業化に子どもたちは挑んでいく。そのために 1 年生から着々と勉強を重

ねていく。そういうことにしていきました。そしてそこでは学校運営協議会の皆さんが中心になって、横の繋がりをつくっていくということです。なにせ学校、先生は地域住民の事は全部知りません。当たり前ですよ。他地域から来ています、ほとんどの人は。私もそうでした。さて、そうなるっていくと子どもたちの活躍する場面というのは地域にどんどん力を与えていくようになります。なぜならば、子どもたちは地域住民に分からないこと聞きますよね。家族に聞きます。分からないから聞くんですよ。そうすると、そこで繋がりが生まれていきます。そういう活動は、実によくマスコミはキャッチしていただきまして、新聞、テレビ、ラジオ、あるいは教育雑誌いろんなものからの取材を受け、露出度が格段に上がっていくんですね。なんとテレビ番組まで。実際には1時間番組にはなりませんでしたが、15分コーナーだったんですね。そういう形で、どんどん報道されていくわけです。そうすると、地域住民というのは自分の地域に対する思いがだんだん熱くなっていきます。PTAの皆さんもそうです。自分の学校って凄いいんじゃないのかと思うんです。そうすると、PTA活動が変わっていくんです。自分たちだけで出来ないことを、いろんな地域の団体とネットワークを結んでやっていこうという動きが自然に出てくるんです。具体を申し上げられないのが恐縮ですが。そうすると、そこに関わってきた人がだんだんと色んなことを言い出します。地域は学校の下請けじゃなくなっていく。学校も良い、関係者も良い、地域も良い、この三方良しの関係が出来ていくんです。さらに、子どもたちの地域に対する見方はだんだん変わっていったって、地域に恩返しをしたってことになっていったって、実は自分たちでNPOをつくるんですね。「恩返し隊」という。何をやったかということ、地域を掃除したり、地域に対して啓発をしたり、そういう活動をしていくことになります。児童会が中心になってやっています。こういう大きな変化が見えてきたのです。地域住民も実はこの学校運営協議会で話し合っていく中で、さっき申し上げましたけれども、地域は縦になっていて、横の糸が張られていない。それにお気づきになっていくんです。地域住民の皆さんが。その学校運営協議会の話合い、あるいは準備を通して、自分たちが知らなかったことを知っていく。そうするとそこに新たな横糸を張っていこうという動きが。バラバラにやっていたことが、もしかしたら一緒にやったらもっと効果上がるんじゃないかなどということをも住民同士が話をするようになっていったのです。その後、私は中学校に赴任し、今度は中学校区でコミュニティ・スクールをつくっていくことになります。やっていくことは小学校とたいして変わらないんですが、小学校の学びは中学校の学びに接続されているかということが大事なんです。私、小学校長から中学校長になりましたので、小学校は一生懸命頑張っていることは分かります。でも中学校の意識ってどうなんだろうって思ったこと、正直何度かあったんです。本当は思っちゃいけないんでしょうけど。でもせっかく育て上げたのに、中学校行ってなんで活躍できないんだとかですね、そんなこと思ったりしたことが正直ありました。でもそれって違うよなと思ったんです。なぜそんな発想しちゃうのか。それはお互いを良く知らないからなんです。だから私は9年間の計画こそ必要だと思った。まさに酒田市さんが今思っていることと同じことを思ったんです。中1ギャップを解消しなきゃいけない。じゃあどうやればいいのかと思った時に、小学校での学びがちゃんと整理整頓されて中学校に上がってきているの

か、つまり既習事項は整っているのかということとか、あるいは地域の特性をちゃんと分かった上で中学校は教育計画を立てているのかとか、あるいは小中の温度差はどうやって解消すればいいんだということなんです、これは学園のようになったら解消できるだろうと思いましたが。まさに小中一貫です。それが実現出来たらたぶん責任転嫁しないようになります。それを目指したいと思いました。私はそのためには話合いこそ大事、お互いの意見交換こそ大事ということで熟議ということをたくさん取り入れてきました。これはまた後程お話しします。学校運営協議会で色々話をしていく中で、キャリア教育どうするんだという話になった時にこんな話題になったんです。実は私が中学校長していた地域は、基幹産業が農業や漁業です。子どもたちが全員もし地域に戻ってきたときに、就業できる場所を確保できるかという話になるだろうという話になったんです。つまり全員帰って来たら勤めるところがない。じゃあ自分でなんとかしなきゃならないってなった時に、それなら起業ということになり、地域住民と議論して根幹に据えるキャリア教育の考え方をアントレプレナー教育（起業家教育）ということにしたのです。これは地域の実情を踏まえた、私にとっては本当に決断というか英断、自分で言うのもなんですがそんな話でした。やっていくとどんどん変わっていきますね。これはさっき小学校の例でお話した時と同じです。地域の人たちがいっぱい学校に関わるようになります。PTA 活動が変わります。既存のシステムを決して潰すことなく、既存のシステムを改編していくんです。プロジェクトチームを編成し、その都度その都度課題解決に向かっていくというスタイルがここで定着していくことになります。そこに書いてある通り、地域活動もどんどん変わっていきました。子どもたちは地域の大人を尊敬できる大人だって見るようになっていきました。これ不思議なんですね。なぜならば、子どもたちのキャリア教育、つまり起業するための学び、講師となってくれるのは全部地域の人たちなんです。なにせ先生たちにそんなこと教えられるはずがないんです。会社のつくり方知らないし、どうやったら現状分析するのも知らないし、それを地域住民がみんな講師になってやっていったわけです。学校の先生は知らないということを本当に万歳して、お手上げですって地域住民にアピールしたんです。そうすると地域住民は、じゃあ俺たちの出番だなんて頑張っていくということなんです。30 時間に及ぶキャリア教育の時間を、地域住民が計画を立てて担っていくことになります。これが大きかったと思います。課題が山積しています。例えば会社つくるときにお金借りに行ってもお金貸してくれなかったんですよね、金融機関。じゃあどうするんだというのを地域住民と知恵を出し合ってクリアしていくんです。こうやっていくと、コミュニティ・スクール推進にはコツがあることが見えてきました。1つは、熟議を諮問機関的に扱ったこと。学校運営協議会で話し合ったことを、不特定多数の皆さんに集まってもらう。3, 40 人くらいの皆さんに集まってもらって自由闊達な議論をしていただく。熟議というスタイルの話合いに投げてやることによって、そこで議論してもらって返してもらう。いわゆる今のワクチン接種の厚生労働省の皆さんが専門者会議に投げてやって、それで専門者会議が厚生労働省に返してくるみたいなものをしていったんです。これが重要でした。そして教職員、地域住民がだんだん自分ごとになっていくという大前提は、やはり目標共有だったということも見えてきた。それがなされていなければ、なかなかその先に

は進めないということも出てきました。やはりコミュニティ・スクールを運営していくには、自分たちだけではできないので、いろんな団体とのコラボレーションが必須でした。それから私が採用したマネジメントサイクルは、PDCA ではありません。私の独自の理論なんですが、LRDC マネージメントサイクルというのを提唱してこれをやってきました。まず俯瞰する。あるものを改良してやってみて、最終的にそこに繋がりが見えなかったらそれは失敗。だから繋がりがもてるようにもう一度 Reform しましょうという、こういうシステムで運営してまいりました。熟議のお話をします。熟議は、多くの当事者が集まって熟慮と討議を重ね、互いの立場や役割、あるいは理解が深まって行って解決策を見出す場合にはそれが洗練されていくんです。最終的な目標は、個々人が納得すればいい。何か最終結論を導かなくてもいい。参加した人たちがこの話合いに出てよかったと思えばそれでいい。これが熟議です。私はスライドの 5 ステップを提唱しやってみてまいりました。まずは共感、それから俯瞰する、協働する、波及する、結束するというのを段階的にやっていく。そうするとこんなイメージが出来上がっていきます。最初バラバラだったベクトルが熟議を重ねていくごとに、だんだん共有された目標に向かっていくということを肌で感じる事が出来ます。熟議を円滑に進めるためには、この 5 つの要件が必要でした。これはやってみて分かったことです。テーマを設定し、話しやすい雰囲気を作り、意見がどんどん出るようにして行って、皆さんが立ち位置を確認したらそれでいい。自分が立っている場所が分かればそれでいいんだ。決められた時間の中で必ず終わるということを守っていく。これでやっていったんです。そうすると、例えばですが今酒田が目指しているスクール・コミュニティの中に、こういった熟議を入れていく。これはどこが主催してもいいんですが、要するに自由闊達な議論が出来る場をたくさんつくっていくということが必須なんだろうと思いましたし、学校がやはり重要なポジションを占めるんじゃないか。なぜかというと、学校というのは非常に利害関係性の低い存在だと思ってまして、例えばそこで商売が起きるとか、何か学校を介して何かすごい勢いで発展していくということではなくて、20 年後、30 年後を見据えて学校教育というものはなされていくわけですから、そういったことを地域の人たちと話し合っていくということはその中に地域活性が必ず生まれてくるということなのです。それは、学校の学びは地域をフィールドにするからです。そういうことなんです。長くなりました、ここまでお話しさせていただきました。

(丸山市長)

ありがとうございました。大変すばらしいお話だったと思います。特に先生、私 35 年前に社会教育主事の拝命を受けた市の職員の OB なんです。それまでは県が派遣した派遣社会教育主事という先生がいて、私がおのちのち市の職員として単独で社会教育主事の辞令を受けた最初が私だと思いますけれども、そういう意味では社会教育主事の仕事というものについては、自分では理解していたつもりでしたけれども、今日先生のお話を聞いてまさにその通りだとこのように思って、その当時の事を思い出しますと教育委員会の中でもやっぱり学校教育が中心なんですよね。社会教育は従の存在。主従の関係で言うと、学校教育が主で社

会教育が従、しかも市長部局から合理化の煽りを受ける。私も公民館主事だったんですけれども、公民館は地域の学校という位置付けではあったけれども、コミュニティセンターにすることで人を引き上げることが出来る。地域に任せることが出来る。そうすると、コストの削減に繋がるというそういう流れの中で社会教育というのは確かに理念をこのような形ですっと前から言われていたけれども、実際の現場ではある意味合理化の対象みたいなところもあって、教育委員会の中では非常に見方によっては肩身の狭い分野だったのではないかなと私自身は思っているんですけれども、今日の先生のお話を聞いてやはり社会教育はこれからももっともっと地域づくりの主流になるべき存在で、私は学校教育とほぼ対等に地域でもってやっていける重要なセクションだなどこのように思ったんですね。ただ、社会教育を担当しているときに思ったのは、先生はコミュニティ・スクールという概念を使って地域づくりを学校と協働の流れの中に持ち込んだということなんですけど、我々の経験した感覚からすると逆に言うと、学校の閉鎖性というのがある意味教育の専門職だということがあって、なかなか地域に開放されていない体制があったんじゃないかなとそんな思いをもっております。したがってこれからいろいろまた議論させていただきますが、鈴木教育長が話をしましたコミュニティ・スクールではないスクール・コミュニティをなぜ進めるかというところ、全てが学校中心ではないということをお互いにある意味表明をしているというところに私も共感を得まして、それは教育委員会と市長部局これも全く別個の存在として存在するのではなくて、お互いに地域づくりをやる、まさに共同体という意味合いではスクール・コミュニティというのは良い言葉だし、これから酒田市が地域づくりを進めていく上では大変良い概念の言葉だなというふうを受け止めまして、これじゃあ是非やりましょうよとなったんですね。そういう意味ではいろんなことを、それこそ熟議させていただいた今日の総合教育会議かなと思っております、本当はもっと長くお聞きしたかったんですけれども、時間の関係で端折って頂きましたけれども、ここからは教育委員の皆さんからも意見を伺いながらどのように先生のお話を受け止めたか整理していきたいなと思ったところでした。せっかくなので、村上委員から皆川先生のお話を聞いた上でどのように感じられたかご意見をお聞かせいただけますでしょうか。

(村上委員)

今、小中一貫教育を1つの契機にして、先生がおっしゃった目標を地域と共有して、今まで取り組んできた地域学校協働活動について見直していく良い機会なのかなと思いました。そうすることで活動の改善が生まれて、活動の深まりや広がりということで先生がおっしゃった横糸を張る一つのきっかけにもなるような気がしました。もう一つ思ったのは、地域学校協働活動は子どもたちにとっても自分は地域の一員なんだという自覚をきっともたせてくれると思います。私も社会教育で何年かお世話になった時に、少年は必要とされて大人になるという言葉をお聞きしました。子どもたちが地域学校協働活動を通して大人になる社会性を身に付けるための良い機会でありますので、ぜひ受け身ではなくて子どもたち自身からも手を伸ばす、僕たちはこれをやってみたい、地域の方とこんなふうにやってみたいというこ

とで繋がっていったらまた違うのかなという気がしました。酒田の地域協働活動というのは、酒田市が掲げている公益ということでとっても繋がりがあっていいのではないかとお話を伺いながら思いました。そういった価値付けを地域の方々にもしていきたい、やって下さることは公益の活動にもなっているんだよ、だから皆さんが今まで人生の中で色々充電してきたことをぜひ子どもたちのために、地域のために発電していただきたい、そういう意欲付けも出来るような学校教育、社会教育でなくてはいけないという感想をもちました。どうもありがとうございました。

(丸山市長)

渡部委員何か感想をお願いします。

(渡部委員)

皆川先生本当にありがとうございました。思ったことですが、子どもたちの目指す酒田市としての人間像、付けたい力、まなびの樹の特に根っここの力を高めるために、地域と学校の協働体制というのは本当に大切だと思ってますし、地域の大人たちが果たす役割は本当に大きいと思います。先生の話の中で、地域と学校がパートナーとして行う活動は目標を共有して参加ではなくて参画であるよと、非常に重いなと思いましたし、当事者たちが熟慮して討議する、それぞれの役割に真剣に向き合って活動するという事はやはり子どもたちにとっても地域にとっても本当に大切なことだなと思ったところです。その中で、活動自体に重荷に感じることなく当事者たちがやりがいであったり、楽しむことであったりとかそういうことも併せてもつことが大切なのかなとは思いました。一つ思ったことは、スクール・コミュニティの中で、プロデューサーの部分があるんですが、このポジションというのは非常に重要な役割だと思うのですが、やはりなられる方の力量だったり熱量だったりとかそういうもの、頼る部分が非常に大きいのかなと思いました。以上です。

(丸山市長)

皆川先生のお話にもありましたけれども、我々公民館主事でいたときは地域と学校とそれから行政がある意味そこで接点になっていましたから、どのくらい効果を及ぼしたかは別として、良い存在で仕事できたかなと思っていました。ただ、我々言われたのは市の職員は採用されたらまず公民館主事になるべきだ、そうすることで地域の皆さんの思いとか課題とかを肌で感じられるので、後々市役所の本体に行った後も非常に有効に機能するという事を言われました。でも今はそういう存在がないわけですね。なので、今実は元に戻そうかという、今のコーディネーターというのは公民館主事みたいなものですね。けどある意味行政と一体となるといった意味では、かなり力のある行政マンがそういうポジションに付くか、あるいは教員の先生で地域との協働にものすごく意識の高い校長先生を退職された方がそこに付くか、いろんな付き方があると思いますが、そこはこれから検討していきたいなと思ってますけれども、いずれにしてもやはり行政と一体感をもった動き方をするためには、

それなりの能力があった人間を配置しないとダメなんじゃないかなと私は思っています。

岩間委員どうでしょうか。

(岩間委員)

教育委員の岩間です。まずは皆川先生のお話、実践者として経験に基づいた今回のご説明、大変勉強になりました。最後の熟議の円滑に進めるための要件、方法論まで今日ここで学んで聞いたことを実生活にすぐ活かせそうだなと思って、委員として役得だなと思っているところです。私も事前にコミュニティ・スクールとスクール・コミュニティの資料の違いを読んでいきながら、やはりコミュニティ・スクールだと学校運営協議会の校長先生が作成したものに沿ってということで物事が進んでいきますが、校長先生の任期が終わってしまえば変わるだろうし、その校長先生はどこに赴任されるかは自分では選べない。そういったところで、やはり先程先生もおっしゃっていた代表者の温度によって変わるんだというところに資料を読みながら不思議だな、そうだよなと疑問に思っていたところが腑に落ちたところです。ですのでスクール・コミュニティの視点でこれから酒田市の小中一貫にこの手法を取り入れて、両方やることで地域も良くなるし子どもたちも健やかに育って将来地元に戻ってくるというところで win-win で、本当にこれが達成できれば未来も良くなる。三方良しに加えて未来も良しの四方良しということで、将来に繋がる取組みとしてぜひ極めていかねばならないと思えました。目標設定の共有に、登山を例にして説明いただいたところに、先日とある会で、「富士山への登頂」を例え話として、散歩しながら富士山に登る人はいないよね。やはり登りたい山があるのであればそれなりの装備をして、しっかり準備をして、苦しいところがあるけれども皆で登ろうよというからこそ登頂できるというようなことがあるから、やはり目標を皆で共有するということはそういうことなのだなと思って、いろんな話を聞きながら共感することができました。今日はありがとうございました。

(丸山市長)

神田先生お願いします。

(神田委員)

皆川先生、本日はどうもありがとうございました。大変感銘を受けまして、本当にその通りだというように感じました。私もこの地域との連携、協働ということを考えた時に、まず大変だと思うのが持続可能性をどうしていくかということと、あとは地域の負担感であるとか満足度というところをどう高めていくのかということ意識していかないと長く続かないのではないかなというところが気になっていたわけですが、ゴールを共有するところがやはり大変重要だというように思いました。また、スクール・コミュニティにつきまして、どういう組織体にしていけばよいのかというのを考えた際に、例えば取りまとめの長の方が校長先生ということになりますと、学校のために何かをしてあげるといような、学校のためにこういうことをして下さい、学校ではこういうことが課題になってい

るのでこういうことをやって欲しいという形になってしまうのかなと、むしろ地域の側から地域の方が例えばトップになって、どうやって地域と学校で一体となって子どもたちの人材育成を出来るんだろうかという形を作っていくのがいいのかなということをお話を伺いながら考えたところです。こうしたプラットフォームになるとするんですけども、こうしたプラットフォームを作っているうちに、この人材育成の最近文部科学省でエコシステムという言い方をしていますが、生体系ですよ、この地域ではどんな課題があってどんな人材が必要とされていて、それに対してこの地域ではどんな資源があるとか、どういう場を提供できるかそういった意見を出し合いながら、最終的にはこの地域に残るか残らないかは分かりませんが、働く場まで提供していきこうということで、起業というところまでを含めて検討されたのは非常に素晴らしいと思いますし、それくらいのスパンで考えていかなければならないことなのかなというように思っていました。あと、ちょっとお伺いしたいなと思ったのは、評価の部分なんです。地域にとってもプラスになっているし、学校にとってもプラスになっている、PDCAの回し方はPDCAではなくて、最終的に繋がりが出来たかどうかというようなことでお取り組みになられているということでしたので、どのような前進が見られたかというのが繋がり、そこを重視されたのかなというように思いますけれども、1つ1つの取組みの質を高めていく際には、繋がりという観点だけで見ていけばいいのか、元々ゴールを設定した際には何らかの育てたい人材育成像みたいなものの共有があるのだと思いますので、そこに向けてそれぞれの取組みが前進したとかしないとかというところを評価というのをされているのかなとか、そういうことも含めて取組んだ方が良いのかどうかというところが、逆に数字が出ちゃうと盛り上がりなくなってしまうようなシラけてしまう部分もあるかもしれないので、肌感覚で進んでいると実感しながらやった方がいいのか、それとも細かく数字を出しながら取組んでいった方が上手くいくのか、なんてところがもしアドバイスいただければと思いますのでよろしくお願いします。

(皆川先生)

ご質問ありがとうございます。皆様、たくさん私が話させていただいたわがままな話をまっすぐ受け止めていただき感謝申し上げます。今まさに評価のお話ありましたけれども、これ様々な評価というものを毎回毎回、事細かにやっていくというのはなかなか難しいです。よって、年に2回ほど評価の話合いの機会を設けておりました。それは、学校運営協議会の拡大版の少しいろんな人に入って。評価委員会という名称ではありませんが。学校運営協議会という名称の中でそれを拡大的にやって、実際に評価をしました。どういう評価をするかという、こちらの方で地域はこういう変化があったかどうか。例えば、この学校運営協議会を経て、新たな枠組みの中で地域活動が行なわれたり、学校の授業が行なわれたりしていくのですが、そこに対して実際に参加している人たちがどういうコメントを残しているか、そういったものを学校運営協議会の皆さんや関係の皆さんから集めてもらいました。そしてそれを披露してもらったりとかですね、実際にこういう声があった、こんなふうな意識をもっているようだ。あともう一つはマスコミさんですよ。新聞でこん

な写真を使ってもらった。こんな文章表現してもらった、そういったものを総合的に集めて、簡単に言うとアウトカムですよね。子どもたちの視点でいけば、そのある1つの行事や授業を経験した後で子どもたちの行動に変化があるか、例えば次のイベント、あるいは次の授業、次の行事に関しての参画度合いはどんなんだということを見ていくんですね。例えば1つ例に申し上げますけれども、私、小学校の学校運営協議会では、教育課程を組んでいく中で郷土芸能を教育課程の中に入れ込むかどうか。どうですかこれ、すごいテーマだと思いませんか。郷土芸能を継続させていくために入れ込んだらいいのかどうかという議論をしたときに、最終結論皆さんどちらだと思いますか。やはり持続性を高めるためには学校でしっかり学んでもらって、それを大人になって活かしてもらおうというふうに行くんじゃないかと思いいになりませんか。答えは180度反対でした。つまり、地域は地域のアイデンティティを学校に渡すわけにはいかない。何故なら学校の授業の中で扱われてしまえば大人たちは参加しにくい。働き盛りの大人はそれに参画が出来ない。つまり、学校で育ててもらうのは良いけど、自分たちはそのプロセスを見る事が出来ない。そこに関われない。だったら違うでしょうとおっしゃったんです。やはり地域で担うべきものは、地域が担う。それでよろしいんじゃないでしょうかといわれた時に、私は涙が出そうになりました。それで、子どもたちがその後どうなっていったかという、はっきりと学校ではそれは扱わない。学校は会場として夜に練習するのはOKだし、土日やるのもOK。でもそれは会場だけ。そうすると、そこに先生たちはどうしたかという、見に行くんですね、子どもたちが頑張っている姿を。学校の教育課程では扱わないと決めたから見に行くんです。ここ面白いですよ。扱うって決めたら自分たち責任背負いますよね。でも、責任背負わなくていいんです。そうすると、気持ちが軽くなるから見に行けるんです。お分かりになりますか。先生たちがなぜ地域の活動に顔を出さないか。顔出したら、自分たちに責任がのしかかってくると思っちゃうからです。子どもたちの立ち振る舞い、あるいはそういったものが地域の人たちにどう映るかってことを、どうしても感じてしまうんです。だから、そういうことを感じないように地域と学校が話し合いをしっかりとしていけばお互いに出やすくなるんです。軽くなるんです。ちょっと話が逸れてしまって申し訳ありません。結果的に、郷土芸能は地域が担っていくことになりました。そういった中で、あれからもう10年経ちますが子どもたちはどうなったかといいますと、実は驚くことに学校では郷土芸能を教育課程に入れないと決めた時の子たち、じゃあその子たちは地域の郷土芸能に携わる人数が減ったのか。実際は逆の結果に。すごく増えました。大人たちが真剣になったからです。学校ではやらない。地域でやると言い切ってしまったから、大人が真剣になった。こうやって変化が見えていく。これを私は評価の指標として見ました。だからすぐ答えが出るもの、例えば毎年ある行事だとか、毎年巡ってくる授業だとかであれば、当然そこへの関与の仕方、あるいは地域住民がどれだけ人数増えたかとかいうのももちろんそれは基準にはなりますけれども、でもあえてあまりそういうことは言わないで、他からの評価の声を大事にやってきました。例えば、他の学校の保護者が転校させたいって言った。これ凄いな、とかですね、そういうことを皆で共有していったという感じですね。なかなか評価は難しいですが、ちゃんとした評価委員会的なものもやりつつも、そ

ういった随時評価というのも皆で共有していった。これが、学校運営協議会と熟議の果たすべき役割だと思っています。いずれ、そこに参加していた人たちが皆スポークスマンになっていって、地域で話していくわけです。これが波及だと思っています。すみません、答えになっていなかったかもしれません。

(丸山市長)

いえいえ、ありがとうございます。先生、実は今回このスクール・コミュニティという構想を打ち出すにあたっては、実は来年度私どもコミュニティ振興会とか自治会を対象に、地域コミュニティまちづくり協働指針というものを作る年になっているんです。実際に完成する年になっているものですから、タイミング的には非常にいいと、したがって酒田市の行政としてコミュニティ振興会とか自治会にこれからいろんなアクションを起こすわけですが、接点でもあるわけですが、その運営、組織の協働指針みたいなものを今作る年になって、ぜひその中にもこの考え方を反映出来たらと思っています。その所管が市の中では市民部という部なんですけど、ちょうど市民部長がそこにいるので、市民部長、今の皆川先生の話聞いて、地域づくりの関係で市長部局として何か感じたことがあればちょっと意見ををお願いします。

(大谷市民部長)

皆川先生、大変勉強になりました。地域と学校の連携というのは以前からも叫ばれてきたのだと思いますが、やはり学校という学力優先という立場があって、なかなか地域活動に積極的に参加されてくるというところは、皆思っているんだけどなかなか進んでこなかったのかなというふうに思います。しかしながら、いろんな実は地域の取組みって私市民部でごみの収集とかそういったことも事業に取り組んでますけれども、やはり地域の子どもの協力あって成り立っているんですね。ですから、今やっていることをうまく組合わせというか集めてきて、それをしっかりお互いに共有することによって、共通認識に立つ。そうすると、実は子どもたち、自分たちがやっていることが地域に役立っているということ意識し始めるというふうに思いましたので、これから市長が申しあげました協働指針策定にあたって地域に入っていきますので、そういった活動も行政でつかんだ情報をしっかり地域にお伝えしながら結びつけることも地域の皆さんから知ってもらおうということに少し力を入れながら、皆さんがご提案されていることについて実現していきたいというふうに思いました。

(丸山市長)

ありがとうございます。急にふりましてすみません。ふりついでに、実は先生今、酒田市の総合計画というのがあるんですけども、これも令和5年度以降の見直しを実はしている最中でして、その所管の部長、企画部ですが、企画部長は確か公民館主事でしたよね。そういう意味では、社会教育についても若い時に経験をした部長ですので、うちの企画部長か

らも一言感想を聞きたいなと思います。

(宮崎企画部長)

私も 30 代のころに公民館に 3 年ほどおりました。その時はコミュニティ振興会という組織と、それから公民館主事という行政からの職員 1 人、全くの 1 人職場でございまして、なんとか地域に馴染まなくちゃいけないなということで、とりあえず顔を覚えてもらおうということで毎日地域の中を自転車で回りました。学校とも仲良くなりたいたいで、公民館という建物はあるんですけれども、毎日のように学校に行って校長室に行ってお菓子をご馳走になったりして、本当に学校と行政と一緒に進んできた経緯がございます。先程、委員からお話ありましたけれども、やはり子どもたちに限らず、大人もなんですけれども必要とされると伸びるんですよね。よく学校で学んで、家庭で育てて、地域で伸びるなんていうことをよく社会教育で言われていた言葉なんですけど、それは子どもたちだけではなくて地域の大人たちも一緒になって育ってるというのが私公民館 3 年間でそのように思った次第です。これから新しいそういった取り組みをまた昔に戻るといようなそういった話もございまして、私としては大賛成なんですけれども、そこに行かれる方はこれから大変ご苦労されるのかなと思いますけれども、総合計画今これから後期 5 年間分を策定中でございます。これはやはり酒田市の指針でございます。これはトップが変わってもという失礼ですが、総合計画自体は誰がトップになっても変わらないでこれからずっと 5 年先、10 年先もやっていかななくちゃいけない計画ですので、ぜひ今回のそういった内容については総合計画の中にも盛り込んで、将来そうなるのであればいいかなと思っております。

(丸山市長)

ありがとうございました。すみません、無茶ぶりで。無茶ぶりついでに、実は先生うちは総務部長が先生と同じで秋田県出身なんです。実は、農林水産省から頂いている職員なんですけれども、もう帰るものですから、ぜひ今日、皆川先生の話聞いて酒田の現状も見ながら感じるころがあれば少しお願いします。

(竹越総務部長)

皆川先生、ありがとうございました。自分の故郷の八峰町、昔は八森町にいらっしゃったということだと思いますけれども、まさかそういうところでこういう画期的なことが進んだとは夢にも思わなくて。ただ本市が見てみて非常にうちの市民というのがやはり商売気質もあるのか、本当に話し始めると物凄くいろんなことをお考えの方が多くて、私なんかはその心に火を付けると言いますか、話す糸口を上手くするとあとはばーっといろんなことを教えてくださいるので、これ多分地域と学校とがこれに繋がっていくんだと思いますが、秋田県人より非常に酒田の方が私なんかが見ているいろんなことを思っている人が多い。そういう意味では、本市でこれをきっかけに鈴木教育長と市長をはじめとして、今おっしゃる構想をしっかりとやれば、おそらく秋田は軽く抜かれるんじゃないかなと非常に危惧もしながら、

そうやって欲しいなと思ってやっておりますので、ぜひ皆川先生からもまた隣近所の秋田県と山形県、酒田はほとんど秋田県だと、市長には秋田県人に乗っ取られているとよく言われるのですが、前の公益文化大学の学長が秋田大学だったり、日本海病院の理事長が秋田から来ていて、商工会議所の会長が実は私の先輩で秋田で、総務部長まで秋田かなんて言われているんですけども、そういったいい意味で秋田県がこの酒田に乗っ取りながら発展できればなと思っております。すみません。ありがとうございます。

(丸山市長)

岩間委員からもありましたけれども、代表の温度に左右されない持続可能な仕組みが大切だということをおっしゃいました。学校長もそうですけれども、この我々行政部局も同じなんですよね。先程企画部長言ってましたけれども、人が変わっても独り歩きできるような仕組み作りというのは我々理想としてはそう思っているんですけど、なかなかそれってやはり人が変わるとそれでも温度差出ますよね。私はそれと同じくらい大切なのは、温度差が出ないような次を担う人材をしっかり育てることが、仕組み作りと同時に必要なのかな。それは多分その地域の風土だったり、地域の文化がそれを成し遂げることが出来るんじゃないかなと思っているので、人づくりと仕組みづくりは同時進行でやっていかないと、どっちかが出来てないと機能を十分発揮しない、そういうことになってしまうのではないかなというふうに考えているのですけれども、そういう意味では非常に今日はいいお話が聞けたなということで、これから参考にしていきたいなと思ったところでございましたが、最後というか結びというか鈴木教育長から一言、全体の話聞いて何かございましたらお願いします。

(鈴木教育長)

ありがとうございます。皆川先生ありがとうございます。子どもたちの立場から考えると、親とかおじいちゃんおばあちゃんとか、お家の方、ご家族、学校の先生ぐらいなんですよね、毎日会う身近な大人というのは、俗に言われる斜めの関係というか、そうではない第3の大人との関わりってすごく大事だってよく言われるわけですけども、筋交いのように強くたくましい子どもたちが育っていくと言われるわけなのですが、そういう仕組み作りをしたいなって思ったところ、今日のような議論をさせていただいて、私としては非常にありがたかったなと思っております。と同時に、やはり課題とされるのは地域プロデューサーと私は勝手にその時、推進員というのがピンとこなかったものですから、地域プロデューサーというふうに頭に浮かんだので使わせていただいているのですけれども、この方のファシリテート力というか導いていく力というかすごく大事だなと思ってまして、公益大学でファシリテートの学びなどもしますよね。あるものを使っていろんな学びをしながら行政の事も分かる、学校教育の事も分かる、地域の色々な事も分かる方ってなかなかいないと思いますけれども、でもその地域に馴染んでいただきながら取り組んでいくことで、そういった方も育っていくのかなと思っておりますので、今市長がおっしゃられたように仕組み作りと同時に人作りということを皆さんと一緒にやっていければいいのかなと思って、とてもとても心強く思

って今日の議論を聞かせていただきました。本当にありがとうございました。

(丸山市長)

最後に皆川先生、ずっと皆さんの意見を聞かれていたわけですがけれども、まとめのコメントということではございませんけれども、先生の方から何かアドバイスを頂ければ幸いです。

(皆川先生)

はい。皆さんいろんなお話をされて、本当に未来が明るいなと思いました。なぜそう思ったかという、皆さんの議論は常に前しか向いていないですよ。後ろ全然向いてないんです。実はこの姿勢が子どもたちにまっすぐ映っていくんです。子どもたちに関わる大人の姿が前向きであれば、子どもたちも前向きになっていくんです。それは私の取組みで、実はよく学力の話もずっとこの総合教育会議の中で議論されてきたと思いますが、私がいた学校の学力はどうだったのか。例えば1つの指標として全国学調ですかね。それを例に取ってみますと、全て右肩上がりです。3年で信じられないくらいの上昇を示していました。なぜそうなったのかと言うと、子どもたちってキャリア教育、あるいは総合的な学習の時間、あるいは地域住民と共に学んでいく世界で何を見てきたかという、答えがないという世界を見てきたんですよ。正解が分からない。例えば、会社創った、商品を開発した。じゃあ、その開発した商品はどうやって売ることか。売った利益はどうするか。最終的に子どもたち CSR を選択するんですよ、利益地域に還元していくということになっていくんですが、これしゃべっていると私、涙出てくるんですけど、子どもたちって凄いんですよ。最初の年に社長になった子どもたち7人いるんですけど、それぞれ皆高校行って物凄い活躍したんですよ。何で活躍したかという、生徒会改革です。答えがない学びをしていく子どもたちにとって、答えのある学びってさもないんです。頑張ればいつか答えに到達できるんです。そうすると、ドリルのやり方も変わってくるし、今 ICT 随分一人一台パソコンですけど、私は校長時代に文部科学省がこれから先 ICT の世の中になるから、アクティブ・ラーニングを実現するために、ICT 活用どうあればいいかというのを全国5つの中学校に指定して、研究してもらいますよという手挙げ方式の研究を受けたんです。それで、2年間研究したんです。ICT 凄いです。これは間違いなく子どもたちにとってプラスになります。ただし使わせ方ですね。その時に、その ICT を使うことが目的なのではなくて、それで何を子どもたちに伝えたいのか、何をつかみ取ってもらいたいのかっていうことを明確にしていく必要があるんです。答えがある学びじゃないんですよ。どうやったら成績が上がるか分からないので手探りなんです。こういった中で学校、地域が皆で答えがない学びに当たっていったというのが大きかったと思います。そして、その時に活躍していくのがまさにプロデューサーなんですよ。酒田市が今定義付けている地域プロデューサーのお仕事ってそこになっていくんです。誰と誰を繋ぐか、どことどこを繋ぐか、これ大きい課題になります。でも、プロデューサーは拝命されたその日にプロデューサーになるんじゃないんです。拝命されてから5か月も6か月も、場

合によっては1年も2年もかかってプロデューサーになっていくんですね。それは、実際私が見てきて味わってきていますので間違いなくそれが答えだと思います。だから、答えを急がない事こそ大事だと思います。それから、子どもたちの学びの中に必ず答えが分からない、正解がなんだか分からない学びを織り込んでいく。これが、私がキャリア教育を根幹に据えた理由の一つでもありました。そうすると、黙っていても答えがある学びの点数化されるものについては上がっていくんです。1度も右肩下がりはありませんでした。それから学校運営協議会の話合いの中で出てきた、うちの地域には学習塾がないんだというのを取り入れて、私は学校の中に学習塾をつくったんです。どうやってつくったかは簡単です。放課後になったらその場所を学習塾にしちゃえばいい。教室のいくつかを学習塾にしちゃえばいい。それから、外部からの講師を入れて、学校の先生が関与しないシステムをつくった。これ、地域の要望だからです。そうやっていくことによってスクール・コミュニティが出来上がっていったんです。それは地域に認知されていきますから、当然高校合格率どうなったという話になります。全員第一志望に合格し、今でもそれは継続しています。一度もそこから外れた事はありません。つまり、1次志望校に入らなかった子は統合校開校以来一人も出ていないということです。何を申し上げたいかと言うと、スクール・コミュニティの未来というのはまさにそういった地域住民とコンセンサスを得ながら進めていくことであり、そして不足なものだったら地域の力でそれを付加していこうということが普通に議論できる場がそこに用意されるということなんですね。だから熟議が大事だと思います。これからコミュニティ振興会ですかね、それを使っていくということなので、最高に良い機関だと思いますので、私そのコミュニティ振興会に関わる皆さんの研修講師を昨年12月にやらせてもらっています。模擬的な熟議もその場でやらせて頂いています。だから、熟議ってどういうものかっていうのは分かって頂いていると思うので、もし具体を知りたい方がいらっしゃれば私、東北大学の先生と一緒に出した本ですけれども、この本の中に熟議のやり方とかどうやってやったか書いてありますので、必要であれば後程資料はお届けしたいと思いますが、要は結局、プラットフォームというお話もありましたけれども、どこをプラットフォームにしてもいいんです。どこの切り口から入っていてもいいんですけれども、最終的に目指す姿、私がやったコミュニティ・スクールも実は最終形はスクール・コミュニティなんです。そこにいきつくために私はコミュニティ・スクールというフィルターを通しただけの話なんです。なので皆さんが今向かっていくところ、コミ振だったりあるいは公民館、あるいは市民センター、新しい図書館、いっぱいフィルターがあるんですね。そのフィルターの通し方をきっちり皆で議論していけば、間違いなくスクール・コミュニティが実現できるはずなんです。学校には、地域からたくさんの期待が寄せられていて、まして学校にはいろんなコンクールだとかいろんな作品応募だとか来てますよね。そのくらい学校には期待が集められています。でも、あれ全部学校でやったら学校パンクしちゃいますよね。実は私、そういった学校がやっている、受けている様々な作品応募とかそういうのを、学校運営協議会の議題に上げたことがあります。どういう答えを出したかと言うと、このままじゃダメだと答えたんですね。委員さんたちはこのままじゃダメだと。じゃあどうしたかと言うと、精選しましょう。そして、それぞ

れの団体は自分の必要性のためにそれを学校に依頼してくるわけで、他の団体がどういう依頼をしているかさっぱり分かってないんです。でも、委員さんたちが夏休み前に学校に来る様々な募集のものを全部見た瞬間にどう言ったかという、これは無理だ。これ国語の先生、美術の先生にどれだけの手間が掛かっているかという話ですよ。それが多忙化防止に繋がって、いわゆる働き方改革に繋がっていくと明言して、その委員さんたちはそれぞれ団体の担当の皆さんに「君たち実情分かっているのか。」という話をしていくんです。これも大きな改革になっていました。だからコミュニティ・スクールもスクール・コミュニティも最終的には働き方改革に確実に繋がっていくんですよ、ということを申し上げたかったのです。本当はまだ言いたいこといっぱいあるんですけども、皆さんがこれから取り組まれるところ色々あると思いますけれども、間違いなく成功しか私には見えません。ぜひこの後もよろしく願います。ありがとうございました。

(丸山市長)

ありがとうございました。あっという間に時間が過ぎてしまいましたけれども、また機会があったら皆川先生をお呼びして、生の声、生のお姿を拝見しながら勉強させてもらえればありがたいなとこのように思います。本当に先生ありがとうございました。

(皆川先生)

こちらこそありがとうございました。

(丸山市長)

それでは、一応協議の時間は終わりたいと思います。その他として皆さんから何かございますか。

(池田教育次長)

先生ありがとうございました。事務局から申し上げます。今年度の総合教育会議は、特段の事情がない限り、本日皆川先生をお迎えしたこの会議で最後と致したいと思います。なお、来年度の会議につきましては改めて事務局よりご連絡申し上げます。また、よろしく願いいたします。以上です。

(丸山市長)

ありがとうございました。また来年度も充実した総合教育会議にしたいなと思っておりますので、どうぞよろしく願いしたいと思います。それでは、本日の座長は降ろささせていただきます。

4 閉会

(池田教育次長)

皆さまありがとうございました。これをもちまして、令和3年度 第3回酒田市総合教育
会議を閉会いたします。どうもありがとうございました。